

# 第13回噴火湾ホタテガイ情報(2010年)

発行日：平成22年11月4日

函館水産試験場・栽培水産試験場・釧路水産試験場  
胆振・渡島北部・渡島中部地区水産技術普及指導所

図1. 噴火湾海底上5mの溶在酸素分布(10/25)

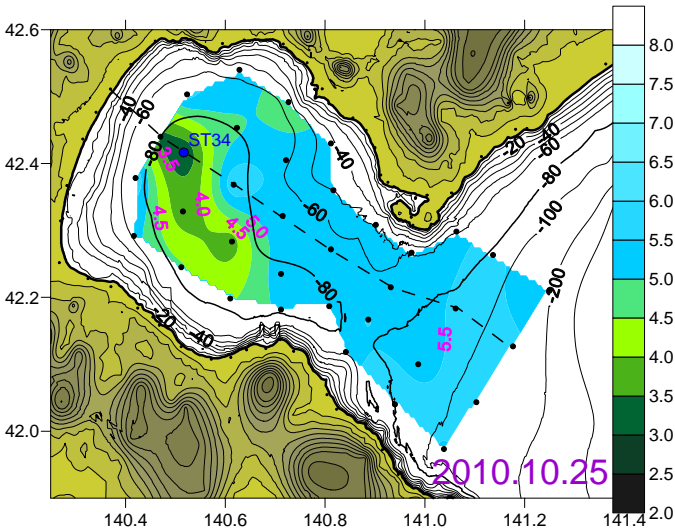


図3. 湾央 St. 34 における環境の鉛直分布(10/25)

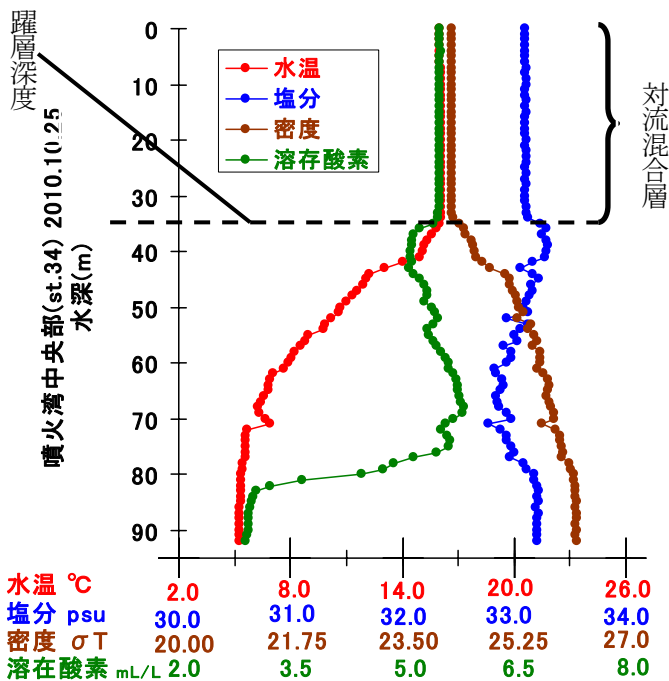
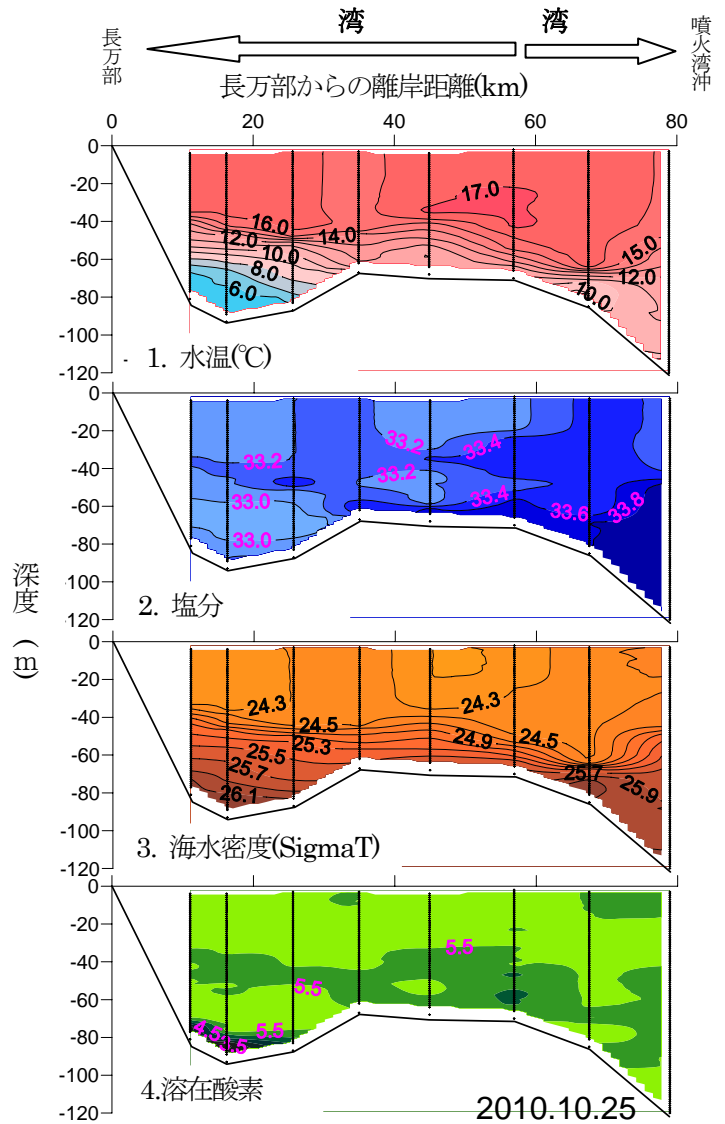


図2. 噴火湾断面の環境変量分布(10/25, 図1の点線部の断面図)



【概要】 10月25日に函館水産試験場の金星丸により噴火湾の環境調査を行いました。海底上5mの溶在酸素濃度は、前回調査(9/14-9/16)よりも明らかに改善しています(図1)。湾外には、塩分33.4~33.8と高塩分の津軽暖流系の海水が分布しており、湾口部の躍層深度(約40m)と底層から湾内に流入しているのが観察されました(図2-2)。秋のシケと大気からの冷却により対流混合が進み、躍層深度が35~40mとかなり深くなりました(図3)。湾内の表層水は厚く安定し、ホタテガイ稚貝等のへい死の危険性はなくなったと考えられます。

過去の環境解析の結果から、津軽暖流が弱く流入が遅い年に稚貝のへい死や変形・欠刻が起きています(2002年、2003年、2009年)。今年(2010年)は、湾内の塩分濃度が低い事から、昨年と同様、津軽暖流水の流入量は少なかったと考えられます。しかし、浜からは、稚貝へい死の情報は寄せられておらず、今年、稚貝へい死の危険性が高い10月を無事に乗り切ったと考えられます。今年の調査で、津軽暖流が弱く流入が遅い年でも、10月のシケのタイミングや規模等の関係で、へい死や変形・欠刻が起きない年があることが、確認できました。稚貝のへい死要因はかなり解明されてきましたが、まだ未解明な部分もあり、今後も調査研究を続けていく必要があります。

2010年の金星丸による噴火湾環境調査は今回で終了です。2011年の噴火湾環境調査は2月下旬の予定です。  
(連絡先： 北海道立総合研究機構 函館水産試験場 調査研究部 管理増殖グループ 馬場・渡野邊・金森)